

金沢

かわら版

10

尾張町しこせ通りで

近年まで残っていたから枯木橋の名がついたとか。詳しく、木は榎(えのき)とまで書いてある。

「金澤古蹟話」になると、正保(一七世紀中期)のころまでは丸木を並べ、山間の深川橋のよう。そして橋の傍らに枯れ木が一株あったために、世の人

が枯木橋と呼び習わすように。

さらに藩政時代は、尾張町と橋場町との境の升形(ますがた)に惣構えの門あり。浅野川口の門の役割を成し、犀川口の香林坊橋の升形門と同じく、城を守る大切な役目をしていった。

「久保市之御神社記」では、問題の枯れ木は神社境内にあったもの。元龜・天正の乱のために、境内の林木がことごとく枯れ木となり、そのまま年を過ぎても残っていたので付近の橋の名前にまでなった。

結果でなく、橋の成り立ちを知ることで、道端の欄干はわかに心のかげ橋となるようだ。(石野 瑋一＝尾張町若手会)

尾張町と橋場町の境、ちょうど交差点の入り口の道の両端に、「枯木橋」と書かれた橋の欄干がある。

雨にぬれると赤くなるのは、赤戸塗(あかとむら)石で作られているから。石のすり減り具合からすると、長い年月が刻まれていることが感じられる。

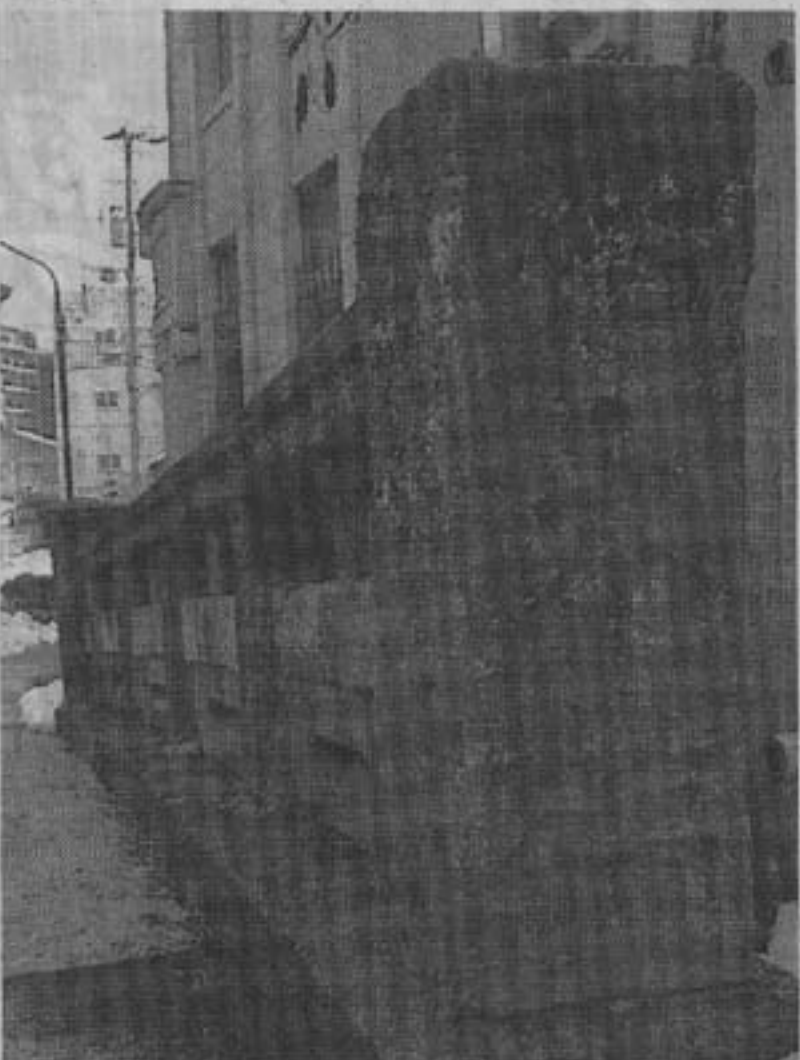
枯木橋

曰くは、車に乗って信号の変わり具合だけを見ていると、つい欄を見落としてしまう。人の考える速さと車の速さは、合わないのかも知れない。歩いてみるいろいろな発見されるのは、歩く速さと走る速さが一致するからか。

古ぼけた欄干から身を乗り出すと、東内惣構橋(ひがしうちところがまえぼり)の用水が下を流れている。この水路は、兼六園下から始まって味噌蔵町、九人橋をたどり、この枯木橋をくぐり抜けて浅野川大橋のたもとに出る。

最近は何でも合理的にということ、かつては加賀藩の重要な用水も、今は暗渠(あんきよ)になっていて。いつの間にか生活の場から見えなくなるこ

藩の重要な用水 いまでは暗渠に



枯木橋

古ぼけた欄干からは、かつてあった水の流れは見えない